小さな内燃車の想い出

「牧場の牛乳、おいしかったね！」

高原から山の下の駅を目指すバスは全身ぶるぶる震えながら、急坂を滑らないようにと黄に紅に煌めく木漏れ日の中をゆっくりと走っていた．カーブが来るとさらにスピードを落とすのだが、それでも右へ、左へとつづら折りの道を行くたびに車内は大きく揺り動かされ、少年の私はお土産に買ってもらった木組みのロボットが壊れないように高々と掲げていたものだ．

「優一郎、気持ち悪くない？お母さん、ちょっと酔ってしまったわ．」
「僕は全然大丈夫だよ！早く駅に着くと良いね．」

通路を挟んだ反対側の座席で、父が時刻表とにらめっこしていた．

「帰りは国鉄の急行列車かなぁ、東武の特急かなぁ…．」
「あら、でも今日はまだ早いのだから、駅に行ってどちらでも切符を買ってからお食事など頂いても良いでしょう？お父さんバスの中で時刻表見ると、酔うわよ．」

排ガスをモクモクと吐いて山道を下って来たバスは土産物屋がひとしきり並ぶロータリーをぐるりと回るといくつも並ぶ降車場の一つにそろりそろりと止まり、ゴトリと大きな音を立てておもむろにその大きな四枚折り戸を開けた．久しぶりに吸う新鮮な空気に私は頭の中まで洗われる思いで、足先から伸ばして背伸びすると大きな大きな息を一杯に吸い込んだのである、目の前に並ぶ全く対照的な二つの駅舎を見比べながら．一つは大きな薄緑色の屋根が豪快に広がり、その屋根を大きく縁取る軒の下に風通しの良さそうで涼し気な空間が広がる駅舎．そしてその左側にあるもう一つの駅舎はやや小ぶりながら、コンクリートの 2 階建ての四角い建物に半円型に縁どられた 2 階の大窓が目立ち、その奥にシャンデリアのオレンジ色の光が覗いている．かたや広々とした高原の駅の風情、そしてもう一つは何か普通の駅ではない空気を閉じ込めていた秘密の館という風情．

「お父さん、僕、左の駅が良い！」
「おいおい、乗るのは東武の特急列車だから、右側の東武日光駅だぞ！」
「あらお父さん良いじゃない、東武のデラックスロマンスカーは豪華でしょうけれど、時間もあることですし、少しお散歩してみましょう、優一郎もいろんな駅を見たいんでしょう？私、坂の下の国鉄日光駅も見てみたいわ．」
「え、坂の下にも駅があるの？そっちも見てみたいな！」
「おいおい、君たちはよく気が合うな．でも駅の見た目で乗る列車を決めるやつがあるかい！」
「あら、ちょっと見るくらい、良いじゃない？」

面倒くさがる父にお土産のロボットを渡すと、私と母はまず坂下の国鉄日光駅へと向かった．色褪せた木組みの駅舎は古いながらに随所に細かな装飾が目立ちこの駅がただの終着駅ではないことを静かに語っていたのだが、幼い私は正面を入ったところの改札前が思いのほか狭く感じ、また改札の向こうに停まっているオレンジと緑の電車も地元の中央線を走っているものと変わらなかったので「あ、165 系だね！」と言うとそそくさと駅から出た．駅舎を正面から見ると上の方に可愛らしい小さな半円形の窓があるのだが、それよりもでかでかと掲げられた「日光駅」の看板が錆びついているのが侘しくて、両親を引っ張るように今来た坂道を再び駆けあがって行ったのだ．

「こっちはどんな感じかな？」続いて入ったのは東武日光駅．広々とした軒下を抜けて駅舎に入ると、その向こうにクリーム色の電車がちらりと見えた．

「駅員さんこんにちは、ちょっと電車を見せてちょうだいな！」

「うん？坊や、電車好きなのかい？よく見て来なよ、その左に停まっているクリーム色のが新栃木行きの普通列車、まもなくその手前にまた別の列車が入るから、注意して見てね！」

二手に分かれている駅構内の、改札を入って右側は空っぽ、左側の一番端の線に、さっきちらりと見えたクリーム色の電車が停まっていた．角ばった車体に片側三扉のちょっと短い通勤電車．
「ふーん、でも東京で見る東武東上線とかと、あまり変わらない感じ！」

再びそそくさと階段を上がり、改札を出る．

「おや坊や、もうお戻りかい？」

駅員さんに有難う！と言って、私は両親の姿を探した．

「あらあらどこに行ってたの！駅に入れてもらってたの？それはそれは…」

ほっとした顔の母親の後ろ、父が「ちょっと切符買って来るから、優一郎見ていてくれよ」と言いながら去って行った．
「もう一つ駅あるよ！ちょっと素敵なの！」私は母を手でこまねくと東武日光駅のすぐ隣りの、あの小さなコンクリート造りの不思議な駅舎へと走って行った．

最後に来た駅は、駅舎入り口にも小さなアーチがしつらえられ、中に入ると吹き抜けの空間が広がった．広すぎもせず、かといって上に抜けるため狭いとも感じない空間の頂点には先程外から目ざとく見つけたオレンジ色のシャンデリアがかかり、その光がわずかな曲面を描く天井に優しい同心円の筋を作り出している．大きくアールを描いた正面の大窓にはステンドグラスが入り、外から差し込む光が改札前の空間に色とりどりの影を落としている．

「駅員さんこんにちは！電車を見ても、良いかしら？」

改札口の奥から出て来た駅員さんは「坊や入場券はないのかい？でもまぁ、ちょっと見るだけなら、ホームが滑りやすいから気を付けてね．」と言いながら窓口横の改札を開けてくれた．

「本当に、すみません．有難うございます．」私を追って小走りについて来た母もついて入る．

改札前の空間から続く人気のない伽藍洞のホーム．大きな銀杏の木が見下ろし、そこから落ちたのだろうか、黄色

の葉がホームを埋めているのがなお一層この駅に温かな静寂を与えていた.

「なんだぁ、空っぽかぁ. 」

と思った刹那、真っ直ぐ並ぶホームの向こうから、何やらバスのような大きな音が近づいて来るではないか. ホーム上に敷き詰められた銀杏の葉が小刻みに震え、そして柔らかな風がホームを撫で、葉はカサカサと囁くように歌い出した. 見上げると、草色とクリーム色の丸っこい列車が入って来るのが見える.

一、二、三、…四両編成！国鉄や東武と比べても一層細くて小ぶりなその列車は、大きな音を立てて入って来るとプレスの入った小さな扉をゴロゴロと音を立てながら開けたのだ.

「お母さん、なんかこの電車、うるさくてちょっと臭いがするねぇ. 」

「そうね、これ、もしかして、ディーゼルカーじゃないかしら. 」

ディーゼル、という聞きなれない響きを反芻しながら私は大して客も降りてこない小さな列車に踏み入れてみた. 国鉄や東武と比べて明らかにこじんまりとした小さめの車内、木製の床には美しくニスが塗られ、草色の座席の上にはほんのり明るい丸い灯火ケースに入ったオレンジ色の白熱電球が灯っている. 私は思わず「わぁ！」と声をあげ、ガラガラの車内に並ぶ椅子の一つに腰掛けると木張りの壁に据え付けられた下段のみ上昇する二段窓から外を見た.

「ねぇねぇ、古いねぇ！お母さん、この電…ディーゼルカーでも、おうちに帰れる？」

「どうかしら、奥武線は確か新宿に出るはずだから、これで何時に帰れるかお父さんに調べてもらう？」

「え、本当！？」

私は小躍りして列車から飛び出した. ちょうどその時だ、東武線の駅の方から父がこちらに来るのを見つけたのは.

「え、何？奥武線？しかも何だその列車…やぁ懐かしいなぁ. ちょっと前の奥武日光快速の車両じゃないのか。今は普通列車でしか使われていないんだろう？時間がかかるぞ. 第一、もう東武の切符を買ったから、今日の帰りは東武だぞ！」

「お父さん、このディーゼルとかいうの素敵だよ？中を見てみてよ、ねぇねぇ. 床も壁も木なんだよ！」

「知っているって. お父さんだって宇都宮出張で使ったことあるんだぞ. 」

駄々をこねる私をよそに、父はさっと踵を返し東武線の方へ向かって行ったのだった.

それから数年、私はことあるごとにあの不思議な丸っこい列車を夢に見た—. 気がつくと私はあのステンドグラス越

しの陽が溜まる改札広場、天井に不思議な同心円の光を投げかけるあのシャンデリアの下にいるのだった．ホームにはあのただ古臭いというのとも、はたまたスピード感があるというのとも違う、どこか芋虫のような雰囲気の小さなディーゼルを連ねた 4 両編成がガラガラ言いながら入って来て、私を乗せた列車は音もなく戸を閉じ、晴れ渡る空の下、真っ赤に色づいた桜の葉が舞い黄金色に輝く銀杏の葉が散る秋の野を、どこまでもどこまでも走って行くのだ．最初は一人で乗ったはずなのに、気が付けば右には母が、左には父が腰掛け、ふと安心して小さな窓を開けると、大体列車は大きな橋梁に差し掛かり、いきなり反対側の列車がやって来て猛烈な風と、そしてわずかな油の臭いが車内に漂うのだった．

六年、七年が経ち、中学校にも入ろうという頃、祖父の影響で度々鉄道雑誌も読むようになっていた私は、あの時に出会ったのが奥武鉄道のキハ 90 系という車両であったこと、そして何より寂しいことに、あの車両は私たち家族が日光を訪れた昭和五十年を最後に引退していたことをようやく知った．あの時の丸っこい列車にもう一度会いたい！その思いが私を奥武線への旅に駆り立てた．私はどこか塗色や座席の雰囲気が似ている大子線のキハ 80 を追い、中学生の三年間、何度も週末の時間を見つけては常陸大子、奥袋田まで通ったのである．湘南顔のキハ80も床は木張りの旧型ディーゼルカーだが、何と言っても全金属車体．私が憧れたあの全面木張りの内装にちょっと薄気味悪い一つ目小僧のような顔つきが妖しいキハ 90 系にはほど遠いと感じ、満たされない思いを抱き続けた中学生時代―．

齢五十も過ぎた今、両親を見送り、私は年に一度、妻とともに紅葉の日光を訪れるのが毎年の楽しみになっている．新宿駅から乗る 10000 系電車の特急「なんたい」にかつて子供の私が憧れた旧型内燃気動車の旅の楽しみはないが、今でもコンクリート二階建ての奥武日光駅舎には当時と変わらぬステンドグラス越しの色とりどりの陽が注ぎ、当時は何もなかったと記憶している吹き抜け上の空間は可愛らしいレストランになっている．その日、私はそのレストランの一等ホーム側の席に腰掛け、旅の帰り、料理を待ちながら眼下のホームに目を落としていた．と、駅ホームの脇に立つ大きな大きな、ひと際立派に育った銀杏の木からはらはらと葉が舞い出した．ビュー、ビシビシ！と窓のガラスが鳴り、目の前はあっという間に金色の風に包まれる．思わずあっと微かな声を上げると、遠くからどこか懐かしいエンジンの音が近づいた．そして小さな子供の声も―．

『―ねぇ、お母さん！なんかこの電車、うるさくてちょっと臭いがするねぇ．―』

はっとして目を上げた私を妻が笑いながら見ていた．

「どうしたの？何か珍しい列車でも来たの？」

「い、いや…僕が小さい頃に乗りたかった列車の音がした気がして．」

「なぁにそれ、どんな列車？」

「いやいや、ここでは走っていないディーゼルカーでね…．うん？」

あの時と同じ、金色の銀杏で敷き詰められたプラットホーム．もう一度そのホームに目を遣るとキハ 4000 系の修学旅行列車が到着したところだった．次から次へと扉から走り出す子供たち．ホームの黄色い絨毯に興奮する子、友達とのおしゃべりを続けて周りの景色には全く関心のなさそうな子、忘れ物がないかと何度もカバンを確かめる子―．

「あ、そうか．ははは…．電車しか来ないはずの奥武日光で小さい頃の夢でも見たかと思ったら、修学旅行の気動車臨とはね！」

一人笑い声を立てている私を面白そうにのぞき込む妻．目の前にとびきり良い香りのビーフステーキが運ばれてきたのは、間もなくだった．